

論 文

「トンボヤ」発行の絵葉書にみる、東京風景の変遷

生田 誠

横浜にあった「トンボヤ」という絵葉書メーカー（商店、卸問屋）が発行した、東京の風景絵葉書（手彩色、人着写真）について考察するのが本稿の趣旨である。しかし何故、横浜のメーカーの製品から東京の絵葉書を考えるのかという点について、疑問に思われる向きがあるだろうし、そもそも「トンボヤ」という名前をご存じない方も多いただろう。まずは横浜の絵葉書店「トンボヤ本店」について書いていきたい。

国立国会図書館デジタルコレクションで紹介されている、山崎恒雄編「絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観」は、1925（大正14）年に大日本絵葉書月報社が発行した、日本の絵葉書店を紹介する商店カタログ的な冊子である。この中の「日本絵画出版業組合員」リストには、横浜市伊勢佐木町二丁目（現在の不二家横浜センター店付近）にあった「トンボヤ本店 吉村清」として掲載されている。しかし、200ページ以上に及ぶこの冊子の本文ページには、「トンボヤ本店」のページはない（10番目の店として、東京のトンボ館が掲載されているが、これは別の店である）。なぜ、「トンボヤ本店」という店の掲載はあっても、個別の紹介がないのか、理由は不明だが、おそらくは1923（大正12）年9月に発生した関東大震災の影響があったと推測できる。この震災では東京よりも横浜の方の被害が甚大だったのはよく知られるところである。震災後のこの時期、「トンボヤ本店」は一時、営業活動を休止していたのではないかと推測される。なお、図1・2は震災前（明治後期～大正初期）の「トンボヤ本店」を写した同店発行の絵葉書である。

この「トンボヤ本店」が顧客に郵送した明治末期、大正初期の消印がある封筒には、経営者の前田徳太郎の名前と伊勢佐木町の本店のほか、梅ヶ枝町に工場、長者町に卸部があったと書かれている（図3・4）。さらに1916（大正5）年頃に「トンボヤ本店」が発行した「営業目録」（図5）には、「伊勢佐木町二丁目十六番地 トンボヤ本店 吉村清」のほか、「梅ヶ枝町十六番地 トンボヤ印刷所」（印刷工場）、「長者町五丁目 トンボヤ印刷部」（コロタイプ印刷所）、「足曳町貳丁目 トンボヤ印刷部」（寫真印刷所）という記載があることを認めている。

ここからは関東大震災（1923年）以前の資料を見る必要があるのだが、この時期の絵葉書、特に絵葉書店について書かれた書籍はほとんど存在しない。その中で、筆者が確認した1冊が黒田久翁著の「回顧八十年」（1963年、ペンドリ）で、これは神田にあった絵葉書店「浪華屋（後の東京図案印刷）」の創業者、黒田久吉（久翁）による自伝的な読み物で、大阪出身の黒田が上京して絵葉書店を開いた1904（明治37）年頃から約60年間、自身や業界についてかなり詳しく記したものである。ここに横浜の有力店舗だった「トンボヤ本店」が登場し、同店と浅からぬ関係があった銀座と神田の「上方屋」についても書かれている。

この「上方屋」とは、銀座にあった「上方屋勝敗堂（後に優勝堂）」と神田にあった「上方屋平和堂」で、いわゆる「上方屋本店」が銀座の店である。こちらは大阪出身の前田喜兵衛が開いた商店で、花札やかかるた、あるいは外国人向けの郵便切手の販売などで財を成し、日露戦争の頃には日本を代表する絵葉書店となっていた。当時のことなどを、黒田は「銀座の主人前

田氏は大阪むき出しの人で、二年続きの日露戦争中、既に店舗の外に、芝に工場、御殿山に社宅、横浜の伊勢崎町と大阪の心斎橋筋に支店を設け、各二号さんの店にしてあった。(中略) 豪奢が過ぎてか数年後、あっさり事業を人に譲って整理し、千葉県勝浦へ隠棲すると、業界訣別の挨拶状を配った」と書いている。

ここに登場する伊勢崎(佐木)町の支店こそ、後の「トンボヤ本店」ではないかと、筆者は考えている。地名は合致する上に、同じ本の中に「横浜のトンボヤ前田徳太郎君(トンボ館とは無縁の別人、また後のトンボヤは義兄弟にあたる)」という記述があるからだ。なお、「上方屋」の横浜支店は元町にあり、伊勢佐木町(帝国商品館)に出張所があったという情報もあるので、横浜に複数の支店があったのかもしれない。また、人物関係では「後のトンボヤ」は先述の吉村清であるから、前田喜兵衛(本店)→二号さんの店(支店)→前田徳太郎(トンボヤ)→吉村清(義兄弟)という店舗の継承があったと推測できる。喜兵衛と徳太郎は、同じ前田姓であり、どういった関係だったのか。その間に二号さんが介在していたのかどうかなど、定かではない点はまだ多い。

ちなみに神田上方屋(平和堂)は、喜兵衛の長女と結婚した岩瀬泰三郎が1895(明治28)年に開いた店である。一方、喜兵衛の長男である前田多門は、東京帝国大学を卒業して内務省に入り、東京市助役や新潟県知事などを務めた。戦後は東久邇宮内閣の文部大臣に就任した後、東京通信工業(後のソニー)の初代社長になっている。また、多門の長男は東大教授、フランス文学者の前田陽一、長女は精神学医の神谷美恵子である。

「上方屋」と「トンボヤ本店」にはもうひとつ、最も大きな類似点が存在する。それは絵葉書のスタイルの共通点であって、裏面における文字の置き方であり、表面における「横浜百景」などのシリーズ表示である。「○○百景」は、「銀座上方屋」だけの専売特許ではなかったが、同じ文字スタイルの「東京百景」を「トンボヤ本店」が受け継いだ。その上で「東京百景」を発展させた、「東京名勝」シリーズと合わせると、500種以上に及ぶ「東京の絵葉書」の大きな世界を作り上げたのだった。



「トンボヤ本店」の創業年は1905(明治38)年と考えられる。実際に筆者が確認したトンボマーク(後述する)が付いた絵葉書は1906(明治39)に使用されたものが複数存在し、ネット上では1905(明治38)年の消印が付いたものも見えるからである。ただ、伊勢佐木町にあった「上方屋(横浜)支店」が、「トンボヤ(本店)」へ継承される過程に経営者の交替、店の創業があるはずで、区切りと成り得るポイントがいくつかあったのかもしれない。1936(昭和11)年に発行された「日本絵画出版業組合月報 組合創立満二十五年記念号」によれば、前田徳太郎は1917(大正6)年にこの組合から脱退している。店はこの時期に吉村清に引き継がれ、関東大震災後の昭和初期まであったともいわれている。

そして、横浜の絵葉書店だった「トンボヤ本店」が何故、多くの東京の風景絵葉書を発行したのかという疑問にも答えなければならないだろう。これもはっきりとしているわけではないが、いくつかの根拠となる事実がある。ひとつは、「銀座上方屋」は芝居好きの平井録太郎が店を引き継ぐ中で、俳優のプロマイド(舞台写真)を商品の主力にするようになる。また、娘婿だった岩瀬泰三郎の店(神田上方屋)でも次第に美術(イラスト)絵葉書が主力商品となっていった。絵葉書という幅広い対象のある商品のうち、この2つの店が別々のジャンルに向かったことで、「銀座上方屋」が開拓した風景絵葉書の系譜は、横浜にある「トンボヤ本店」に引き継がれていったと考えられる。

もうひとつは、横浜という所在地の特殊性である。船舶の便により、日本が諸外国と結ばれ

ていた時代、外国人が集まる場所は横浜、神戸、長崎といった港町だった。こうした街に絵葉書店が現れ、彼らを相手に営業範囲を拡大したのは当然の理である。詳しく書くことはできないが、後に述べる「トンボヤ本店」の分類の中で、「神戸」「長崎」のジャンルが見られないのは、現地の先行商店との間に協約があったのではないかと思われる。一方で、需要の多い東京の風景絵葉書は、「銀座上方屋」のシェアを受け継いだことで、横浜の絵葉書と並ぶ主力商品となったのである。

ここから、「トンボヤ本店」の絵葉書に見られる記号・番号の分類を見ていきたい。この店では、各地の絵葉書を記号（T、Yなど）と番号の両方で整理していた。例えば、東京は「T」、横浜が「Y」（図6）、京都が「G」、大阪が「O」といった記号が頭に置かれた上で、それぞれ1から番号が振られていくというもの。京都（KYOTO）が「G」であるのは、神戸が「K」だからで、神戸の絵葉書は先述したように神戸にあった絵葉書店から発売されていたようである。こうしたジャンル分けは次第に広がり、やがて「宮」（広島・宮島）や「姫」（兵庫・姫路）などの漢字も登場してきた。また、「M」（図7）、「W」（図8）は当初からの混合ジャンルで、日本各地の絵葉書が含まれていた。これは「ミックス」「ワイド」の意味だったのかと推測できる。この記号・番号による分類方法は、海外の絵葉書店の手法を取り入れたもので、「銀座上方屋」でも初期の絵葉書（国内向け）には番号を振っていたことがあった。しかし、番号だけでは多種多様な絵葉書の分類はできず、途中から番号は消えている。「トンボヤ本店」も当初は数字だけを振っていたが、途中から記号を加えたことで多くの種類をカバーできるようになり、地方の間屋との取引にも大いに役立ったのである。

「トンボヤ本店」の初期絵葉書には、裏面（宛名面）の切手貼付場所に大きめのトンボの絵が描かれていた（図9・10）。いや、このトンボの絵があるからこそ、「トンボヤ本店」が発行した絵葉書であると確認できる。「銀座上方屋」も横浜の絵葉書売り出ししており、そのスタイルは後の「トンボヤ本店」のものとそっくりだった。「トンボヤ本店」が「銀座上方屋」のスタイルを受け継いだとすれば当然で、店名の記述がなければ区別することはできない。そこにトンボの絵を付けたことで、初めて「トンボヤ本店」の商品であることが確立したのである。

ここで少し遅くなったが、「トンボヤ」という店名の由来にも触れておきたい。絵葉書が一大ブームになった日露戦争当時、「トンボ」は「勝ち虫」として人気があった。絵葉書の中にトンボのデザインが登場するもの確認できる。さらに大きな理由は、江戸時代の加賀藩の藩祖である前田利家はトンボの前立が付いた兜を着用したことだろう。推測ながら、こうした点から前田徳太郎が開いた店が「トンボヤ本店」となったのではないかと考える。

図10のように裏面の切手貼付場所にあったトンボのマークは、やがて左下に移動し、切手貼付場所からは消える（図11・12）。また、裏面にはトンボを散らしたデザインが登場した時期もあった（図13・14）。これらが一目でわかる「トンボヤ本店」の絵葉書の特徴だが、裏面の「郵便はかき」の文字のうち、ひらがなの「はかき」がカタカナの「ハガキ」に変わり、しかも「キ」の字が「トンボの絵文字」に変わっていることも同店の絵葉書の独特のスタイルだった。そして、新しい目印としてトンボは表面に登場する（図15）。表面右下に商品のマークとなって現れたトンボは、下から上へ向きを変えながら長く存在し続けた（図16）。ちなみに同タイプで神戸の絵葉書を発行していた商店（栄屋）は、裏面や表面のトンボに代えてライオンマークを使用している。

発行元を示すこのトンボの横には、それぞれの絵葉書の名称が付けられるが、その前にシリーズ名が付けられたものも多数存在する。東京の風景絵葉書では、初期のシリーズ名無しのタイプから図15のような「東京百景」へ、さらに図16のような「東京名勝」と変わっていった。図

17～19では、「浅草五重塔」における初期タイプの変遷の例である。また、図20～22は「浅草公園十二階」における後期タイプの変遷の例である。

ところで、先述の大正中期（1916年頃）に発行されたとされる「トンボヤ本店 営業目録」には、絵葉書の販売リストに見える「日本名勝集」（極彩色 各十枚壺組 金五十銭）のシリーズの中に「東都十景」「東都十勝」があり、「欧米人をして嘆賞せしむる、邦國の最も明媚なる、山水の粹を抜きて、百種を撰定したり」と書かれている。ここでは、東京以外の各地の名所も発行されており、全体では「百種」に収まるはずはない。いささか不思議だが、明治末期の販売目録でも同じ掲載があるから、こうした大雑把な販売方法が一般的だっただろう。なお、小売店からの注文は「現品番號にて御注文願外」と付け加えられており、絵葉書の注文は10枚単位で受け付けていたようだ。この目録の「東都十景」「東都十勝」と「（絵葉書）百種」の関係は不明だが、「東京百景」と関係があるはずで、「トンボヤ本店」は「百」という数字にかなりこだわっていたようである。そうした謎を含みつつ、「トンボヤ」発行の東京風景絵葉書は、ほとんどが手彩色というカラフルなスタイルで、大正中期（1917年前後か）まで発行されていたと考えられる。



「トンボヤ本店」が発行した東京絵葉書シリーズの最初である「T1」の絵葉書は、どこの風景だったのか。残念ながら手元にある最も早い番号は「T4 堀切菖蒲」（図23・24）、次は「T5 青山御所」（図25）なので、推測するよりほかはない。「銀座上方屋」の場合は、最初の「1番」は「二重橋（皇居）」だったから、同様に「二重橋」が選ばれた可能性があるだろう。あるいは、横浜（桜木町）とつながっていた当時の鉄道の起点「新橋駅」だったのか。ちなみに、「トンボヤ本店」発行の「新橋駅」の絵葉書は手元になく、「二重橋」の方は「T87」として登場している（以下は「トンボヤ本店」発行の東京絵葉書のリストの一部である）。

T4（東京百景）堀切菖蒲	★トンボマークなし
T5（東京百景）青山御所	★トンボマークなし
T6（東京百景）芝増上寺山門	
T7（東京百景）向島の櫻	★トンボマークなし
T10（東京百景）新橋	★トンボマークなし
T12（東京百景）芝神明神社	
T15（東京百景）向島の櫻花	★T7とは異図案
T16（東京百景）浅草公園十二階	★シリーズ名無し、東京名勝のタイプも
T18（東京百景）上野公園の櫻	
T19（東京百景）赤坂弁慶橋	
T21（東京百景）浅草五重塔	★トンボマークなし、シリーズ名無しも
T23（東京百景）丸ノ内楠公銅像	
T28（東京百景）新吉原	★同番号で異図案
T28（東京百景）浅草観音	★同番号で異図案
T31（東京名勝）小金井の櫻花	
T32（東京名勝）浅草観音	★T28とは異図案
T33（東京百景）芝増上寺山門	★同番号で異図案
T33（東京名勝）上野広小路	★同番号で異図案
M34 羽田穴守稲荷橋	

T 36 (東京百景) 靖国神社	
T 38 (東京百景) 上野公園の櫻	
M41 羽田穴守稲荷	
M43 (東京百景) 浅草公園十二階	★ T16とは異図案
T 45 (東京百景) 参謀本部	
T 50 (東京名勝) 浅草観音五重塔	
T 53 (東京百景) 浅草仲見世	
T 55 (東京百景) 隅田川上流	★東京名勝のタイプも
T 56 (東京百景) 浅草仲見世	★ T53と同図案
T 57 (東京百景) 愛宕山眺望	
T 59 (東京名勝) 日本銀行	★「日本銀行望ム」のタイトルも
T 61 (東京百景) 浅草花屋敷	
T 62 (東京百景) 浅草観音	★ T28、T32とは異図案、東京名勝のタイプも
T 63 (東京百景) 浅草公園	★ トンボマークなし
T 65 (東京百景) 向島枕橋	
T 66 (東京百景) 靖国神社庭園	
T 67 (東京百景) 九段坂	
T 68 (東京百景) 浅草奥山の大佛	
T 69 (東京百景) 九段坂上	
T 70 (東京百景) 芝高輪御殿	
T 71 (東京百景) 芝公園の御霊屋	
T 72 (東京百景) 芝公園の御霊屋	★ T71と異図案、「の」に代わり「ノ」も
T 75 (東京百景) 浅草公園瓜生岩子の像	
T 76 (東京百景) 両国橋	★ トンボマーク無しも
T 77 (東京百景) 向島竹屋の渡	
T 78 (東京百景) 回向院	
T 80 (東京百景) 新吉原	★ T28とは異図案
T 81 (東京百景) 新吉原	★ T28、T80とは異図案
T 83 (東京百景) 赤坂弁慶橋	★東京名勝のタイプも
T 84 (東京百景) 丸ノ内宮城	
T 85 (東京名勝) 和田倉門	
T 87 (東京百景) 二重橋	★ トンボマーク無し
T 88 (東京百景) 日比谷公園音楽堂	
T 89 (東京百景) 日比谷公園	★東京名勝のタイプも
T 93 (東京百景) 上野櫻雲台石段	★ トンボマーク無しも
T 94 東京市街 (其一)	★ T94～97で、4枚続き
T 95 東京市街 (其二)	★ T94～97で、4枚続き
T 96 東京市街 (其三)	★ T94～97で、4枚続き
T 97 東京市街 (其四)	★ T94～97で、4枚続き

以上58種が筆者の手元にある、1～100までの番号の付いた、「トンボヤ本店」が発行した東京の風景絵葉書である。同図柄で異なった番号のものもあり、同番号で異なった図柄も存在す

る。100のうち約半分しか確認できていないが、ここからこのシリーズの特徴を見ていくことにしたい。まず地域的に見れば、東京の南東方面にあった名所が多いことが特筆できる。一方、北西側の地域はほとんど取り上げられていない。これは、横浜が東京の南にあったからで、「M34 羽田穴守稲荷橋」と「M41 羽田穴守稲荷」（図26）という、現在の羽田空港付近の2カ所が選ばれていることも特徴となる。この2枚では「T（東京）」ではなく、「ミックス M」（図7）の記号が採用されており、理由は東京府下ではあるが、東京市内ではなかったからだろうか。また、銀座、京橋付近の風景は見られず、後に「T191 有楽町」や「T238 京橋」や「T242 歌舞伎座」などが現れてくる。また、「T94~97」で4連続きの「東京市街」が取り上げられていることもこの時期の絵葉書としては珍しい例である。いずれも手彩色のカラーが美しく、なかなかの出来栄を示すものだった。



実は、筆者が本稿のような「トンボヤ本店」の絵葉書に着目し、集中して集めるきっかけとなったのは、これとは別の特徴がこの店の絵葉書にあったからである。それはひとことでいえば、他店の絵葉書には見られない、風景における人物の扱い方である。例えば、「T28 新吉原」（図27）では遊女の顔見世をクローズアップし、同じ番号の「T28 浅草観音」（図28）では鳩の豆売りの様子を大きく切り取っている。この題材の選び方、風景のカットの方法はさらに進化して、「T75 浅草公園瓜生岩子の像」（図29）では岩子の銅像を背景に小さく置き、手前にいる子守りの子供たちを大きく見せることに成功した。主役は銅像ではなく、子供たちかと思わせるよう構図である。また、「T123・124 堀切菖蒲」（図30・31）では、庭園で遊ぶ6人の女性（芸者）たちを取り上げている。彼女たちは、撮影のために集められたモデルであったはずで、カメラマンの要望でポーズをしていたのだろう。「T123~128」のような同一のタイトル（堀切菖蒲）を付けて、同じ名所、似た風景を集中的に撮影するのもこの店が得意としたやり方だ。同じ時期というなら、「T142~153」は、春に撮られたサクラのシリーズである。中でも「T146~150」は、花見時期の上野公園の様子ばかりが撮影されている（図32）。さらに「T156~164」は同じくサクラのシリーズで、江戸川や靖国神社などの春の風景がまとめて登場する。なお、ここで断わっておくのはこれらの間には未収の番号があるので、他の題材が挟まれている可能性もあり得る。

これまで見てきた「トンボヤ本店」の絵葉書の多くは、海外の絵葉書フェアや絵葉書店で買い求めたものが多い。一方、国内では「トンボヤ本店」の絵葉書の遭遇する確率は低い。言い換えれば、この店の製品が主に外国人に売られて、多くが海外に渡って行ったということ。横浜にあったメーカーだからということ以外にも、外国人が好んだ理由があったからだろう。それが、ここまで述べてきた題材の選び方、撮影のアンブルなどにあったともいえる。風景と人物の組み合わせの巧みさは際立ち、さらに風景の中の季節感の演出にも優れていた。秋の紅葉、冬の雪（図33）、中でも先述したサクラの花が咲いた春の風景は、この店の大の得意分野だった。やがて、「トンボヤ」は、「T（東京）」のグループのブランチャ（枝）として、「Tc」というグループを立ち上げる（図34・35）。これは、東京（T）とサクラ（cherry）の組み合わせで、これまで20種類ほどを確認している。日本を代表する花、サクラが咲いている風景は、われわれ日本人も外国人も大いに好んだもの。この後、他の絵葉書店（メーカー）でも春のサクラに注目し、花見風景の絵葉書セットなどを発売するようになった。

最後になったが、論題に掲げた「東京風景の変遷」にも触れなければいけないだろう。これだけでも長大な論考になるテーマであり、あくまで明治末期~大正中期という短い年代の絵葉書の中、しかも「トンボヤ本店」発行のものに限るという条件のもとでは、手短かに述べるしか

ない。まずは、絵葉書（先行の浮世絵、石版画も）が市販される商品で、多く買い求められたものが現在まで残っているという事実を示しておきたい。人々の目と手で淘汰されて受け継がれたものだけから、振り返ることのできる東京風景なのである。

「トンボヤ本店」の「東京百景（後に名勝）」シリーズの内容を分析するカギのひとつは、タイトルに含まれる「百景」にあると思われる。多くの数を示す「百」と「風景」「景色」の「景」の組み合わせだが、東京と組み合わせられるとき、まず思い浮かぶのは初代歌川広重による名作シリーズ「名所江戸百景」であり、その伝統を受け継いだ小林清親の「武蔵百景」である。幕末（1856～1858年）に出版された前者と、明治中期（1884年）に世に出た後者という2つの浮世絵シリーズの後を継ぐ存在となったのが、「トンボヤ本店」の絵葉書ではないかということである。前の2つは浮世絵（木版画）で、「トンボヤ本店」は絵葉書（人着写真）という違いはあるものは、アングルや着眼点はかなり似通っているように思える。広重の「名所江戸百景」は、「トンボヤ本店」の絵葉書の遠い先祖であり、そこから大きな影響を受けたことは間違いないだろう。広重は1818（文政元）年に画家としてデビューし、このほかにも多くの江戸風景を描いている。その中で「名所江戸百景」は最晩年の作品で、一部は没後に出版された。故にこの中の風景は、最も「東京」に近い「江戸」のものである。そして、広重以外にも江戸の風景を描いた画家（浮世絵師）はほかにも大勢いたが、広重が優れているのは題材の選び方と、風景の切り取り方の巧みさだった。

広重の「名所江戸百景」の伝統を受け継いだのが「明治の広重」と呼ばれた浮世絵師、小林清親である。清親は大正時代まで生きて長く活躍し、「武蔵百景」以外にも「東京名所図」などの名作を残している。1876（明治9）年から出版された「東京名所図」シリーズは、「光線画」と呼ばれて、風景画の世界に新機軸を打ち出したものだった。そこには写真の応用があったが、一方でこの時期流行した「開化絵」と呼ばれるタイプとは一線を画しており、多分に江戸情緒を漂わせていた。この事実、他の画家が選んだ風景が市中のハイカラな場所だったのに対して、清親の場合は広重の絵と似た場所で、江戸の名残のある風景を見て絵筆を取ったからだろう。それを木下杢太郎は、清親は大正時代に「古東京」を描いたと論評している。「東京名所図」からさらに8年が経過した明治中期に描かれた「武蔵百景」では、清親はもう一歩、江戸に近づいた。即ち、広重の「名所江戸百景」の風景にさらに接近したはずである。

少し話を広げ過ぎたのかもしれないから、絵葉書の世界に戻りたい。実は絵葉書には、「写真」と「絵画（イラスト）」の2つのタイプがある。だから、絵葉書＝写真ではないことを断った上で、「絵葉書のような風景」というステレオタイプの概念ができた事実も指摘しておきたい。歴史的には絵画から写真という流れ、日本の場合でいえば、浮世絵（木版画）→石版画→絵葉書（写真）という、風景に関する出版物の変化があった。ここでの表現方法の差と、画家（絵師）と写真家（写真師）のまなざし（目線）の違いが重なって、それぞれの作品、あるいはシリーズの特徴、さらに特筆すべき芸術性が生み出される。江戸の広重、明治の清親という浮世絵、明治・大正の「トンボヤ」の絵葉書の世界は、それぞれ個性的でありながら、風景に対する共通の思い、伝統の継承があったのではないか。清親の目線の先と同様、「トンボヤ本店」の写真家のレンズの先にも江戸の風景、広重の作品があった。彼らは広重や清親が見ていた風景を選び、先行作品にヒントを得ながら、撮影を行っていったのである。

故に「トンボヤ本店」の絵葉書は、江戸にあった「雪月花」を大事にした。絵葉書における「月」はこの後、夜のシリーズで表現されることになる。「トンボヤ本店」は江戸以来の「花」に注目し、「Tc」シリーズを出した。明治後期に降り積もった「東京の大雪」も絵葉書にしている。絵葉書の世界に一時代を築いた「トンボヤ本店」は、「東京の風景」の変遷を知る上

でも重要な作品なのである。なお、最後になったが、「トンボヤ本店」の前田徳太郎が1911（明治44）年の正月に出した年賀状を紹介したい（図36・37）。「御勅題 寒月照梅花」という「ピクトリアリズム」スタイルの絵葉書で、「トンボヤ本店」はこのタイプの絵葉書の発行も得意としていた。

◇参考文献

- ◎訂正増補再版日本全国名所葉書目録 小竹忠三郎編 小竹忠三郎蔵版 1913年
- ◎絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観 山崎恒雄編 大日本絵葉書月報社 1925年
- ◎日本絵画出版業組合月報 組合創立満二十五年記念号 日本絵画出版業組合 1936年
- ◎回顧八十年 黒田久翁（久吉）著 ペンドリ 1963年
- ◎巷の目撃者～絵はがきがとらえた明治・大正・昭和～ 新宿歴史博物館 1999年
- ◎明治・大正・昭和 東京写真大集成 石黒敬章編・解説 新潮社 2001年
- ◎横浜今昔散歩 原島広至著 中経出版 2009年
（なお、筆者の著作は省略させていただきます）

（いくた まこと 絵葉書研究家）



トンボヤ 図1



トンボヤ 図2 (図1の部分)



トンボヤ 図3



トンボヤ 図4



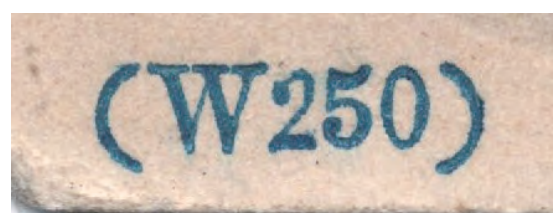
トンボヤ 図5



トンボヤ 図6



トンボヤ 図7



トンボヤ 図8



トンボヤ 図9



トンボヤ 図10



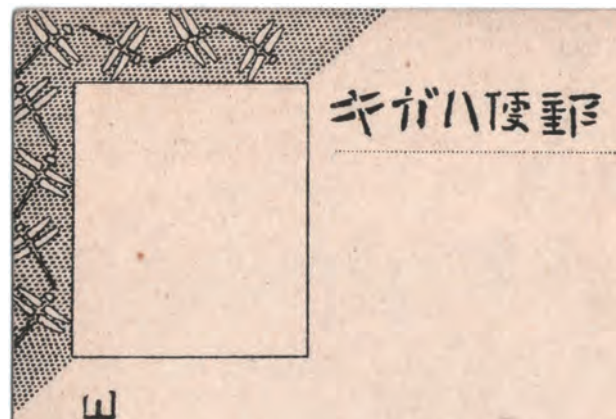
トンボヤ 図11



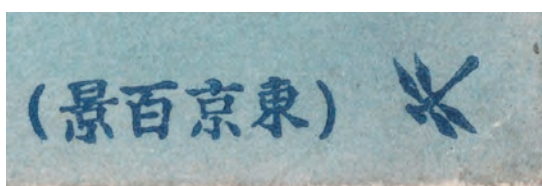
トンボヤ 図12 (図11の部分)



トンボヤ 図13



トンボヤ 図14 (図13の部分)



トンボヤ 図15



トンボヤ 図16



トンボヤ 図17



トンボヤ 図18



トンボヤ 図19



トンボヤ 図20



トンボヤ 図21



トンボヤ 図22



トンボヤ 図23



トンボヤ 図24 (図23の部分)



トンボヤ 図25



トンボヤ 図26



トンボヤ 図27



トンボヤ 図28



トンボヤ 図29



トンボヤ 図30



トンボヤ 図31



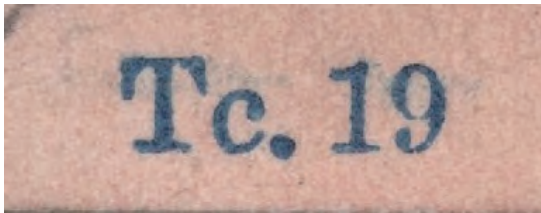
トンボヤ 図32



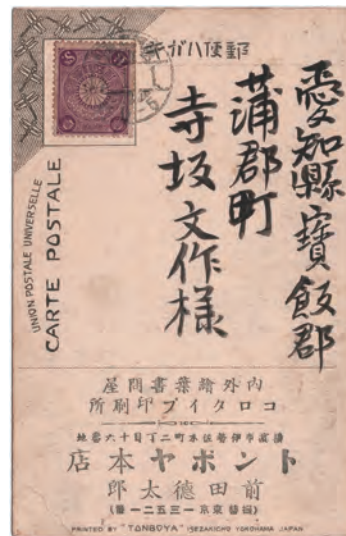
トンボヤ 図33



トンボヤ 図34



トンボヤ 図35 (図34の部分)



トンボヤ 図36



トンボヤ 図37